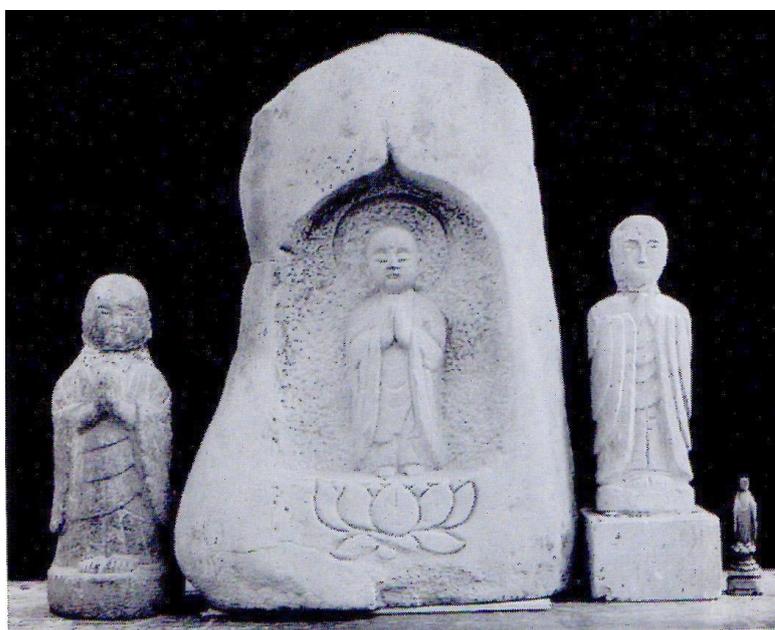


オンゾハン

「地蔵菩薩」史料



法土寺町「姫野宅横地蔵菩薩像」



江戸時代の「地蔵まつり」

作成／2023(令和5年)/06/27
放生津校下「ふり返る未来研究会」
法土寺町「姫野宅横地蔵菩薩像」世話人会

目次

「地蔵菩薩」史料	
I. 富山大学文化人類学研究室資料	
1. オンゾハンとは	
1-1. 日本各地の「地蔵信仰」と新湊のオンゾハン	1
1-2. オンゾハンの様々な由来	1
	2
2. オンゾハンの世話	
2-1. 管理・運営の主体について	3
2-2. 日常的な世話の内容	
2-3. お堂について	
2-4. 袈裟、帽子、その他の備品について	4
2-5. お供え物について	
2-6. 賽銭箱	5
3. 地蔵祭について	
3-1. 日付の決め方	6
3-2. 地蔵祭 山王橋の近くのオンゾハン	
3-3. 地蔵祭 光明寺前のオンゾハン	
3-4. 昔の地蔵祭	7
	8
4. オンゾハンの現在と今後	
4-1. 奈呉町の集合住宅近くのオンゾハン	9
4-2. 「今井」さんの世話するオンゾハン	
	10
5. まとめと考察	11
II. 法土寺町4地蔵・まつり写真記録	14
III. 「荒木菊男」新湊市文化財審議委員	19

「地蔵盆」

「地蔵盆」(じぞうぼん)とは、地蔵菩薩の縁日(8月24日)を中心に行われる、子どもたちが主役の行事のことをいいます。日本では古くから地域や子どもの「守り神」として、「地蔵」さんが信仰されていました。仏教に属する「地蔵菩薩」は人々を救済する存在で、それが民間にも「地蔵信仰」となって広がり、路傍(ろぼう)の神である「道祖神(どうそしん)」の信仰にも結びついて、道端に地蔵さんが増えていったと言います。この地蔵さんを供養するのが「地蔵盆」。子どもの守り神であるため、「子どもたちが主役」となって催されます。

「地蔵盆」が近づくと、地蔵さんの像を洗い清めて、新しい前掛けを着せ、化粧をするなどして飾り付けます。古くから赤には、「魔除け」の意味があり、子どもたちを守って欲しいという願いが込められていると言います。

「地蔵尊」と、子どもの名を書き入れた「提灯・幟(のぼり)」を飾ります。「提灯・幟(のぼり)」は、白と赤の二種類があり、本来区別はありませんでしたが、最近では男の子が白、女の子は赤にするところが多くなっているようです。名前を入れるのは、「地蔵尊」と「子ども」の両者の縁を結ぶという意味があるとか。また、その年に生まれた子供の名前を書いた提灯・幟(のぼり)を奉納し、それらを毎年「地蔵盆」に飾る地域もあります。

「地蔵盆」は、近畿地方を中心とする地域で古くから親しまれてきた行事で、北陸地方や新潟、長野市周辺でも行われています。東海や関東では、ほとんど定着しておらず、これは「地蔵信仰の歴史」のちがいによるもののようです。京都では室町時代に、「地蔵盆」が大流行しましたが、東京で地蔵さんが作られたのは、「江戸時代」になってからと言われています。

新湊の「オンゾハン」(地蔵菩薩)

「地蔵菩薩」史料作成

地蔵菩薩(じぞうぼさつ)は、仏教の信仰対象である「菩薩の一尊」。釈尊が入滅してから弥勒菩薩が成仏するまでの、「無仏時代」の衆生を救済することを釈迦から委ねられたとされる。

大地が全ての命を育む力を、蔵するように苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込み、救う所から名付けられたとされる。

日本における「民間信仰」では、「道祖神」としての性格を持つとともに、「子供の守り神」として信じられており、よく子供が喜ぶ菓子が供えられている。

日本では一般的に、親しみを込めて「お地蔵さん」「お地蔵様」と呼ばれる。

そんな「地蔵菩薩」に関する資料を「後世に残す」ために、資料収集したものを記するものである。

放生津校下「ふり返る未来研究会」

I. 富山大学文化人類学研究室資料

富山大学文化人類学研究室(富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野)では、1979年の研究室創設以来、教育の一環として、北陸の一地域を選んで調査実習を行い、その成果を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。この報告書は、その第28巻になります。

2019年2月

富山大学人文学部 野澤豊一(主担当)

藤本 武(副担当)

原 七泉(担当学生)

はじめに

2年次に初めて新湊を訪れたときに、辻々に地蔵(新湊では「オンゾハン」と呼ばれる)を祀った「お堂」が沢山ある光景に驚いた。さらに、「お堂の扉」を開けてみると、綺麗に掃除されており、花や供え物がしてあった。それを見たとき、石仏がただ道端に置いてあるだけではなく人々の生活の中にあることを感じ、新湊の人々にとって石仏がどのようなものなのかを知りたくなった。

調査では、主に町内の「オンゾハン」に詳しい方々を対象に聞き取り調査を行った。聞き取り調査では、町内での「オンゾハン」の世話の持ちまわり、各々の世話の内容、「オンゾハン」にまつわるエピソードなどを聞いた。また、8月と9月に「地蔵祭」に参加し、現在の地蔵祭の様子を観察した。さらに、富山県の民俗に関する文献や新湊市史を用いて「オンゾハン」の由来や昔の地蔵祭について文献調査を行った。

1. オンゾハンとは

1-1. 日本各地の「地蔵信仰」と新湊のオンゾハン

地蔵とは、石自体を信仰の対象とする「石仏信仰の一つ」であり、地蔵を祀る文化は日本各地にある。富山県以外では、滋賀県、奈良県、大阪府、福井県など京都府周辺の地域や九州地方などでも地蔵が祀られている。

また、新湊以外の富山県全域でも石仏信仰は盛んであり、道端には、「地蔵菩薩」や馬頭(ばとう)観音、川や水辺には弁財天や水天、山では磨崖仏(まがいぶつ)など様々な場所で見ることができる。「地蔵祭」も現在に継承されており、新湊以外の地域でも、地蔵に供え物をし、お経をあげてもらうのが一般的である。



図5-1 オンゾハンの密集マップ

現在高岡市福岡町で親しまれている「つくりもんまつり1）」も元は地蔵祭であった。

射水市新湊の内川沿いは、特に地蔵が多く安置されており、新湊では地蔵を親しみを込めて「オンゾハン」と呼んでいる。

「オンゾハン」に彫る顔は、亡くなった人に似せるのが一般的である。また、オンゾハンのほかにも新湊は神社や寺が密集しており、「私の家はかつて、三方を神社や寺に囲まれていた」と語る女性もいるほどで、宗教色の濃い地域であるといえる。

1-2. オンゾハンの様々な由来

「オンゾハン」の由来は様々であるが、実際に話を聞いたり文献で調査を進めたりするなかで一番よく聞いたのが、「水難事故」にまつわるものである。60年程前までは「子供が内川でよく遊んで」いて、遊んでいる最中に、船の下に入ってしまい出られなくなるなどして溺れた子供が沢山いたという。

さらに、新湊は古くから漁業の盛んな街であり、漁師が海で亡くなることも多かった。

また、新湊は元禄時代から現在に至るまで「50 戸以上」が焼失した火災が「44回」起こっており、火災で亡くなる人も多かった。奈呉町の「気比住吉神社」には、「来名戸社」(くなどしゅ)があり、岐(クナト2))の神が8体祀られていることから分かるように、新湊は日本海に面しており大陸から「コレラ」(コロリ)などの疫病が入って来て、しばしば蔓延した。

その時に、亡くなった「子供を供養」するためにつくられた「オンゾハン」も多い。

昔は、大雨で川が氾濫することが多かったため、川沿いにある「オンゾハン」が海や川の下流まで流されることもあった。

それが漁師の網にかかり、捨てるわけにもいかず置くところもないので自分の世話している「お堂」に入れることもあった。また、網に「オンゾハン」がかかることもあれば、かかった石が何となく「オンゾハン」のように見え、捨てることができずに持ち帰ったこともあったという。

「古新町中部」では、20年ほど前に、「地蔵祭」の一週間前にお地蔵さんを洗い清めるために外に出して置き、掃除が終わってもう一度袈裟を着せようとしたら、誰が新たに「オンゾハン」を一体足したのか、袈裟が一つ足りなくなっていたことがあった。

このように、自然と「オンゾハン」が増えることはしばしばあった。本町の「宮林家前」の「オンゾハン」は、大地主であった「宮林家」の一人息子が幼くして病気で亡くなったため、その供養としてつくられた。しかしそれが亡くなった息子に似ていなかったため、その後新たにもう一つ作り、現在では2つ並んで宮林家の前に安置されている。

災害の他にも、様々な逸話が残っている。「おさん」は近世の新湊に生き、歌舞音曲の諸行に通じた女性である。近世の新湊には「遊郭」があり、「200人程の遊女」がいたと言う。



写真5-1 おさんの像(袈裟を着たオンゾハンの後ろ)

「おさん」の身元は確かではないが都下りの白拍子³⁾とも、高貴な方の落胤⁴⁾(らくいん)とも言われている。

ある年の夏、「おさん」は上方から来航した廻船の若衆と恋に落ちたが、男には妻子があったためやがて破局した。失恋したことで半狂気になった「おさん」は、満月の夜に心ゆくまで歌曲に思い出をのせて、小川池で投身自殺をした。人々はこれに心を打たれ、小碑を建てた。その小碑は現在、「奈呉町」のお堂近くにある。

2. オンゾハンの世話

2-1. 管理・運営の主体について

本節では、人々による日常的な「オンゾハン」に対するお世話について記述する。

新湊では、世話人のグループのことを「世話方」や「地藏講」などと呼ぶ。

まずは、各町内での「オンゾハン」の世話人の構成について記す。

これは、地区によって事情が異なる。例えば、「古新町中部」の「オンゾハン」では、周辺に住んでいる決まった5、6軒で世話をしている。「古新町中部」の「オンゾハン」以外の「オンゾハン」でも5、6軒で世話をしているところが多く、それ以外の人でも、たまに世話の手伝いをしたり、祭のときだけ集まる人もいる。また、世話の担当ではなく世話全般を気づいた人が行っている。

「大楽寺門前」の「オンゾハン」(紺屋町)は、昔は30から40軒だったが、現在は内川沿いの18軒で世話をしている。1ヶ月交代で世話をしているため、一年半に1回世話の担当になる。世話をする人に子どもはなく、ほとんどお年寄りだけで世話をしている。

「乃木町」の「オンゾハン」(本町)では約3軒で世話をしており、2、3ヶ月交代で世話をするのだが、現在は世話を実際に出る人が減ってきて困っている。

他の「オンゾハン」にもいえることだが、70歳から90歳代以上の女性が中心となって世話をしている。

「光明寺前」の「オンゾハン」の世話は、自治会と関係なく近所の有志が行っているが、「地藏祭」のために自治会費として各家から300円集める(500円の年もある)。

「地藏祭」のためのお金は、東町西部や天神町など、各地区毎に集めて、地藏祭の後に1年間に使った備品や地藏祭の出費などをまとめた収支報告書を作る。また、オンゾハンにも専用の通帳があり、例えば「光明寺前」の「オンゾハン」では、そのお金を使って、昨年お堂の雨もりを直した。

立町は、妙蓮寺裏のオンゾハンでは周辺住民の自治会の5、6班でオンゾハンの世話をしている。毎年各家からオンゾハンの維持費を集金するが、金額は間口の広さによって異なり、広い家で7000円、それ以外の家では、2000円から3000円である。各家の集金額に幅があることに対して、住民から苦情が出たことはないという

2-2. 日常的な世話の内容

普段の世話は、お堂の扉を開いてお参りをし、ご飯や花を供える、コップの水を替える、線香をつけるなどが主である。自宅の仏壇に供えていたお菓子やおつまみ、果物をおさりのような形で供えるところもある。夕方になるとお堂の中に明かりをつけ、夜には扉を閉める。線香はお参りの際につけてゆく人もいるが、たとえ常備していてもロウソクを使う人はあまりいないという。ほとんどのお堂には電気が通っており、吊灯籠が飾られているためである。

例えば、「奈呉町」の「オンゾハン」は夕方6時30分に自動で灯がつき、翌朝6時に消えるため、世話の担当者が灯に気を配る必要がない。こう書くと世話がずいぶん簡易化されているようだが、人々の意識は必ずしもそうではない。

昔から世話をしている野村さん(西新町)はお地藏さんの世話に熱心な方で、近所の方と「りん台と御仏飯がくすんでいる」と言って自宅に持ち帰っておられた。そして、「お世話は引退したつもりなのについつい世話を焼いてしまう」と言っていた。

2-3. お堂について

お堂は、「オンゾハン」を安置し供養するための建物で屋根の形は神社に似ている。

まったく飾りのないものもあるが、木鼻⁵⁾がある場合もある。一般的なものは高さが1.6m程であり、お堂自体が風や雨などで、傷むのを防ぐためにガラスの囲いがしてある。屋根はトタン製で、屋根下の壁や内部は木製である。小さいものは0.6m程である。一般的なお堂にはセメント製や石製の台があり、人の目線とオンゾハンの高さが同じくらいでお参りしやすくなっているが、小さいものは石製の台が無くさらにガラスの囲いや扉が無いものがほとんどである。

また、八幡町の「西福寺」のように「オンゾハン」が1.6mと大きく、お堂が2mを超えるものもある。

お堂建築に関心を持った人もいる。例えば、中町の「土部さん宅」向いの「オンゾハン」は昭和20年代にお堂を新築し、「六角堂」として近所では有名である。また、立町の放生津橋近くの「オンゾハン」を世話している方によると、60年程前に当時壁屋を営んでいた「綾川」さんという人が趣味でお堂を作っていたという。

『しんみなとの石仏 第三集』(放生津文化振興会、放生津公民館、新湊市教育委員会 平成15年)によると、その作品の一つに八幡町の光明寺前のオンゾハンがあり、1930年(昭和5年)の東町・荒屋火災に伴う「地藏堂」の移転の際に綾川さんが蓮の鍔絵を描いたという。

また、「秋葉神社横」の「オンゾハン」は秋葉神社の鳥居を新しく建造するのに伴って、小杉の鍔絵で有名な「竹内源造」さん(1886-1942)がお堂を造った。お堂の屋根の部分には「龍、横の壁には象と獅子」が描かれており、聞き取り調査のなかでも、複数の方が嬉しそうにこのことを話していた。

小杉地区に住む「横山さんによると、竹内さんが存命だった頃、横山さん宅横にある「オンゾハン」のお堂の前を最寄り駅までの通り道としてよく使っていたという。そしてある日、お堂が古くなっている事を気にかけて、後日無償でお堂を提供してくれたという。このように、竹内氏は鍔絵の技術をお堂にも活かし、それが現在でも残っている。以上から、お堂は無個性なものではないことが理解されるだろう。

2-4. 袈裟、帽子、その他の備品について

西新町の野村さんのように昔から世話をしている女性のなかには、「オンゾハン」の袈裟や帽子、りん台、地藏盆の時に使うものなどを手作りしている方もいる。多くの方は、80歳以上の高齢の女性で、嫁ぐ際に持ってきた帯や着物を使ってそれらを作り、余りを自宅に保管して現在使っているものが古くなって使えなくなった時に出す。高齢女性で仏具を作った事のある人は、各町に数人ほどずついるが、現在ではそのような人が減ったため、近所の仏具屋で買う事も増えた。

なかには紺屋町などのように、周辺に寺が多くりん台や祭壇用の布を寄付してもらっているため、特に困っていない地域もある。



写真5-4 (左) 野村さんが保管している帽子

写真5-5 (右) 段ボールに入れて保管している袈裟

また、塚原地区では、袈裟や帽子は今でも手作りする人がいる一方で、リン台や地藏祭の時に祭壇に敷く布は使わなくなったという。

袈裟や帽子は、ケースに入れて一つ一つ保管してあることが多く、例えば西新町内川沿いにある「オンゾハン」では、どの「オンゾハン」にどの袈裟をつけるのかが小さな紙に書いて入れてある。ケースは袈裟や帽子を作った人の家の車庫や、物置に保管していることが多い。

線香やお香、ろうソクは予備が常備されている。それらはお堂の後ろに常花と置いてあったり、現在使われている仏具と一緒に「オンゾハン」の前においてあったりする。一緒にお香の入った丸香炉が2つ常備されているお堂もあった。

2-5. お供え物について

「オンゾハン」のいる小堂のほとんどには、花、水、オボクサン(オンゾハンに供えるご飯のこと)、お菓子や果物、蝋燭や線香が供えられている。

お供え物の花は、昔は生花がほとんどであったそうだが、現在では常花(とこはな)にするところも多くなっている。夏場は花が腐りやすく、冬場は吹雪などで毎日花を替えるのが難しいことがあるからである。今でも生花を供えている「オンゾハン」では、各家から集めた「オンゾハン」の維持費を使って生花を買って来たり、自宅の庭に咲いている花を供え物として持つくる人もいる。

また、古新町中部の「オンゾハン」では造花を常に供えており、それに加えて毎月1日と15日に定期的に生花を供えている。生花・造花にかかわらず、次に供える花を前もって用意しておいて小堂の後ろに置いておく所も3分の1ほどあった。

さらに、奈呉町のように常花を置くところもある。花の他にも、水や御仏飯が供えられているところが多い。御仏飯は虫がつくのでラップをかけて朝小堂にもっていく。水は湯飲みやコップに入れて毎日替えるという。

また、お菓子や果物をお供えする場合もあるが、この時は「オンゾハン用」に買ってくるのではなく自宅にあって仏壇に供えるようなスナック菓子などを供える。

人々が「オンゾハン」にお供え物を持っていく様子を観察していると、新湊の人々はただ供えているだけではないように思えた。

例えば、田町の「オンゾハン」(本町2丁目)を世話する女性は「夏は暑いから供え物の水に氷を入れるんだよ」、「冬は寒いから、小堂の扉を閉めてあげるんだよ」と話しており、「オンゾハン」を敬いながらも身近な存在として接していることが伺える。

2-6. 賽銭箱

どれくらい昔から賽銭泥棒がいたという情報には、地区で差がある。例えば「法土寺町」の70歳代の男性によると、賽銭を誰かが盗むようになったのはごく最近になってからだという。

また、泥棒は賽銭と一緒にお供え物も盗んでゆくが、お供え物や賽銭は、「オンゾハン」のものだから、盗むのは「けしからん」ことだと言っていた。

他方で、多くの地区では、お年寄りが子どものころから、「賽銭泥棒」がいたという。その対策として、世話の担当者が「賽銭箱」の中の小銭を定期的に回収して預かったり、「賽銭箱」を小堂の中に「打ち付けて」小銭がとられないようにしてきた。



写真5-6 西新町のオンゾハン

その一方で、「賽銭泥棒は昔からあったことであり、特に目くじらを立てないようにしている」と語る人もいて、「賽銭泥棒」に対する考え方は様々である。

3. 地蔵祭について

3-1. 日付の決め方

「地蔵祭」の日付の決め方には2種類ある。8月24日を中心にして決めるものと、過去に起こった出来事の日付をもとに決めるものである。

私が調査した範囲では、前者が圧倒的に多く、後者は数件聞くだけだった。8月24日が多い理由は、毎月24日が地蔵菩薩の縁日(6)であり、その中でもお盆の近い8月に地蔵祭を行ってきたからである。また、8月24日は旧暦の7月24日に近いことから、7月に「地蔵祭」を行うところも多い。

後者の代表的な例は、後述する光明寺前の「オンゾハン」である。昭和5(1930)年9月5日に、「東町・荒屋で火災」が起こった事をきっかけに、周辺の「オンゾハン」を一箇所に集め、「地蔵祭」を毎年9月5日に決めたのである。

基本的には、このように日付を決めるが、それに付け加えて天候や僧侶の都合も日付の決定に関わっている。多くの地蔵祭りは屋外で行われるため、雨や台風の影響で日にちを前後に変えることもある。また、前述したように7月と8月の24日付近の夕方は、僧侶への祈祷の依頼が多く、忙しいので、その日に僧侶が来ることができない場合もある。

3-2. 地蔵祭 山王橋の近くのオンゾハン

私が初めて地蔵祭を見たのは、「山王橋」近くの「オンゾハン」である。以前は別の場所にあったが、平成13(2001)年5月に現在の場所に移転した。人の集まる土日に祭をすることも増えたなか、このオンゾハンのお祭の日には8月24日に決まっている。

8月24日16時頃に、山王町の「オンゾハン」の所に到着すると、すでに数人の女性が集まっており祭壇の準備をしていた。そのうちの一人に話を聞くと、掃除は涼しい朝のうちに終えたという。

オンゾハンを「甘茶」で洗い、お堂の空気を入れ替えたり、ガラスを磨くなど掃除をしたらしい。そして今は、自宅から祭壇に使う机を持ってきて設置するところだという。

祭壇の供え物の並べ方に特に決まりはないようで、過去の写真を参考にしている様子はなかった。また、その場にいる人たちで決められないことがあれば、僧侶に相談して決めていた。

私が参加した2か所の「地蔵祭」ではなかったが、一般的に「地蔵祭」では、派手な提灯や幟を飾る。幟は赤、水色、白、紫などで、その年に亡くなった人に対して寄贈されたものである。

祭に参加した人たちは、60歳代から90歳代の女性10人ほどで、準備を終えると各自で椅子や敷物を持ってきて座る場所を作っていた。予定よりも数分遅れて、お経が始まると、参加者は持参した数珠を持って静かに聞いていた。

祭の参加者には、目を閉じてお経を聞く人が半数くらいいたが、途中で改めて手を合わせるなどの、所作のタイミングが一致しているところが面白く感じられた。始まって数分すると、丸盆に載せた焼香セットを、一周目は順番にお焼香をし、二周目はお賽銭を集めていた。お経は12分ほどで終わり、参加女性が僧侶にお菓子、飲み物、謝礼を渡すと、僧侶は帰っていた。その後はすぐに祭壇が片付けられ、お供え物が平等に配られて解散した。

3-3. 地蔵祭 光明寺前のオンゾハン

「光明寺前」の「オンゾハン」とは、八幡町光明寺の前にあるお堂に祀られている約20体の「オンゾハン」のことを指す。昭和5(1930)年9月5日に東町・荒屋で火災が起こった事をきっかけに、周辺の「オンゾハン」を一箇所に集め、地蔵祭の日を毎年9月5日に定めた。数十年前までは、「地蔵祭」の担い手の中心は小中学生だったが、時代の流れとともに青年団、次に老人クラブ、そして自治会が中心となって地蔵祭を続けてきた。

祭の当日に東町に行ってみると自治会の掲示板に「ご案内」という張り紙があり、地蔵盆の日にち、準備、集金のメ切について書いてあった。張り紙によると、男性が前日に会場作りとテント張りをし、女性がオンゾハンの御身洗いと祭用の袈裟への着せ替えを担当し、地蔵祭の次の日に後片付けが予定されていた。

18時前になると人が集まってきて甘茶を飲みながら談笑したり、祭用に飾った祭壇や「オンゾハン」を写真に撮る人が多かった。

なかには昨年の写真を参考にして、出来るだけ例年通りの祭壇を再現しようとしている人もいた。

18時から「地蔵祭」が始まる予定だったが、10分遅れてお経が始まり、はじめは雑談している人も多かったが次第に静かになった。「地蔵祭」に参加したのは、60歳代から80歳代の方が中心で15人前後だった。なかには、50歳代くらいの比較的若い女性も参加していた。

また、山王橋近くのオンゾハンと違い、男性が3分の1程いた。お経が始まって5分程してから焼香が始まり、焼香を終えとお盆に小銭を載せて次の人に回していた。途中参加の人もいたため、2周目もあった。20分程でお経が終わりお供え物の赤飯、飲み物、謝礼金を受け取った後にお坊さんが帰った。

その後、親子の尼さんが来て「御詠歌」7)を歌った。主に娘さんが歌い手、お母さんがリンを鳴らす役だった。お経を聴くときよりも皆集中して聞いており、なかにはリズムをとっている女性もいた。

尼さんが帰った後、すぐに全員で慌しくテント以外の片付けが始まり、私もお供え物の食べ物やお菓子を頂いた。

私は、「地蔵祭」にどちらかという、巖かで神妙なイメージを抱いていたが、実際に参加してみると決まりごとが少なく、和気あいあいとした雰囲気であったため意外だった。



「光明寺前」の「オンゾハン」

3-4. 昔の地蔵祭

氷見市や富山市八尾、砺波市など富山県内の様々な場所では、古くから地蔵祭が子供中心の祭として運営されてきた。

新湊でも、昔から「地蔵祭」は主に小中学生の行う祭として親しまれてきたが、少子高齢化に伴って小中学生の頃に祭を行っていたお年寄りの世代が、現在でも祭を行うことになっている。

以下では現在のお年寄りが子供だった60年から70年前に、どのように祭を行っていたかについて述べる。

かつて「地蔵祭」に参加していたのは、小学校3、4年生から中学生だった。「オンゾハン」のある町内の子供が主に参加していたが、内気でイベントに参加するのが苦手な子や、「オンゾハン」に、先祖代々縁がなく特定の「オンゾハン」を世話していない家の子供は、参加する事がなかった。

立町の「妙蓮寺」近くの「オンゾハン」では、地蔵祭の当日子供が集まってくると、まず年上の中学生が年下の子供たちに「〇〇は□□寺に行っていこい」などと指示して奉加（ほんがん）（お金）を集めさせていた。

年下の子供は指示された場所に行き、「△△町のオンゾハンに奉加してくだはれ」と言ってお金を集めたと言う。年上の中学生は「地蔵祭」の会場で待機し、奉加の金額を帳面につけたり、管理をしていた。そして奉加を集めて戻ってきた、年下の子供からお金を受け取るとまた指示を出すということを繰り返し、最終的には2、3万円ほど奉加が集まった。

また、奉加を集める際に 幟（のぼり）を担いで「オンゾハンの奉加でござんますてーと一文でも二文でも あげて呉たはーれか 頼んますてー 念仏申しますてー」と言いながら各家庭を回る町もあった。

新湊博物館の学芸員である「松山充宏」さんによると、奉加を集める子供が「お賽銭をくれないとここを通さないぞ」と言って走行中の車を止めることもあり、そのために事故が起こることもあったという。

奉加を集めると、次にオンゾハンに詳しいおばあさんに教わりながら、お堂の飾り付けをした。お供え物などの買出しは、その頃からすでに大人の女性がやっていた。

僧侶によるお経が終わった後に、中学生がお供え物のお菓子や果物や余ったお金を配る。この時、奉加をより多く集めた子供が多くもらう事ができるため、子供たちは毎年奉加集めに精を出した。また、余ったお金でアイスクャンディーなどを買うのも楽しみのひとつだった。

子供たちは奉加集めを初めて間もない頃は、「オンゾハン」に対して特に関心があるわけではないが、年を重ねるごとに次第に関心を持つようになり、日々守ってもらっている事への感謝や「オンゾハン」を敬う気持ちが育ったという。

奈呉町の「綿さん」や「二口さん」によると、お二人の祖母の世代には御詠歌7)（ごえいか）を歌える人が多かったという。その背景には昔のお年寄りの寺との関わり方が関係している。今の70歳代以上の人の祖父母は、60歳をすぎると日がな一日近所の寺に行ってお詣りしていたという。

そこで同世代の人とお喋りをしたり、僧侶の法話を聞いていたため、自然と御詠歌を身に付けることができたという。そして「地蔵祭」の終盤になると一か所に集まって御詠歌を歌っていた。現在では周辺の寺社で仏教講座や仏教婦人会の例会は開かれているものの、以前のように生活の一部としてお寺と関わることは少なくなった。

「綿さん」は、個人的にはぜひ御詠歌を歌ってほしいと思っているが、一度御詠歌が始まると3時間は歌わなければならないで大変だし、そもそも歌える人もほとんどおらず実現するのは難しい」とおっしゃっていた。

「地蔵祭」には、子どもたちの喜びイベントや納涼祭を兼ねていたところもある。坂東地区に住む竹脇良孝さん(70歳)は、幼少期に叔父が主催していたイベントについて語ってくれた。そのイベントというのは、景品名を書いたくじを道端にランダムに置いて子どもたちが、それを引くというものだ。景品はおもちゃ、日用品、駄菓子、畑のきゅうり、なす、トマトなどの野菜で、たった数十円のものでも子どもたちにとっては楽しみな恒例行事だったという。また、子どもたちは当日にくじを引くだけでなく、事前に景品を決めたり、当日景品を隠すための簡易的な小屋を作る役目も担っていた。

現在では、イベントや納涼祭を地蔵祭と同じ日に行う町は多くはない。そんななか、現在でも「地蔵祭」の後に住民同士の集まりを行っている「紺屋町」では、毎年お茶をしながらおしゃべりをするのが恒例だという。紺屋町に住む「手林さん」は、「今年はぜんざいを作ってみんなで食べるんだよ」と嬉しそうに語っていた。「地蔵祭」は日ごろ住民を守ってくれている「オンゾハン」に感謝を示すだけでなく、住民同士のコミュニケーションの場としても大切な役割を果たしているようである。

4. オンゾハンの現在と今後

「オンゾハン」の世話の仕組みや他の「オンゾハン」の世話方との関わり方は、環境や時代の変化に伴って柔軟に変えていかなければ後世に継承することが難しくなることがある。以下では、区画整理に伴って町内10ヶ所以上の「オンゾハン」を一ヶ所に集めた「奈呉町」と、お堂の再築に伴って一軒だけで世話をすることに決めた「今井通さん、恵子」さんの世話する「オンゾハン」を紹介する。

4-1. 奈呉町の集合住宅近くのオンゾハン

時代の流れとともに、「オンゾハン」の世話の仕組みを根本から変えたのが「奈呉町」である。「奈呉町」には、古くから「オンゾハン」があり、一番古いものは「室町時代」に作られたという。

「奈呉町」は、昭和30年頃まで、特に人口の多い地域であり、気比住吉神社から湊橋までの狭い範囲に、1,200人ほどが住んでいたという。住民がひしめき合う地域であったことと、昭和30年頃までは、土地の所有権に関して口うるさく言う人もいなかったこともあり、昨年大半の地蔵堂を撤去するまで、道路にはみ出していた「オンゾハン」も多かった。

しかし、空き家が増え住民が少なくなることに伴って奈呉町の区画整理を行い、集合住宅を作るようになった。

そのために、国から各家に下りた補助金を使って、昨秋に新しくできた集合住宅のそばに奈呉町すべての「オンゾハン」を一ヶ所に集めた地蔵堂を作った。集められた「オンゾハン」のなかには、「旧奈呉町のオンゾハン」を現在の中町と奈呉町の人々で世話していたところもあった。

「奈呉町」には元々11ヶ所に地蔵堂があったが、国からの補助金をもらう事ができたのはそのうちの9ヶ所だけだった。

しかし、補助金がもらえたところだけでオンゾハンを一ヶ所にまとめたとしても、将来的には残りの2ヶ所も世話をする人がいなくなってしまうため、補助金が出ない地域ではオンゾハンのための積立金を使った。

「奈呉町」では「お堂」の移転に伴って「地蔵堂の起工式8）」、地蔵堂のマークの作成、地蔵堂の完成式を行った。起工式は平成29(2017)年5月7日に行われた。30人程が出席し、光明寺の住職が安全を願って祈禱を行った。

また、一ヶ所に集めるのに伴って「Worldly Design」の「明石あおい」さんに「奈呉町」の「オンゾハン」のマークをデザインしてもらい、「地藏祭」などの時に飾る幕を作った。このマークは奈呉町の「奈」の漢字をモチーフにして作られ、色は魔けの意味合いのある「神社朱」と呼ばれる赤色にした。

「地藏堂」の完成式は平成29(2017)年9月23日に行われた。この日は「あんじさん9」にお経をあげてもらう他にも、事業所が「焼きそばの屋台」を出したり町内で曳山を曳くなどして完成を祝った。

「地藏堂」を一か所に集めるのに伴って、「奈呉町」ではオンゾハンの世話を自治会で管理することにした。具体的には、自治会のなかに「地藏尊の世話人会」という組織を作り、奈呉町の全78世帯に世話をしてもらうようにした。

「地藏尊の世話人会」は自治会長の「綿さん」、副自治会長2人、昔から「オンゾハン」の世話に関わり世話をいとわない2人を合わせて男性の5人で構成されている。

このように、世話は地区住人の全体にした一方で、「地藏祭」の際の集金は、今のところは有志にしている。

それは、世話という形で「オンゾハン」に関わるうえに集金も全世帯からしてしまうと、元々世話に熱心ではない人が「オンゾハン」に関わることを義務だと感じてしまい、精神的に負担に感じてしまうからだという。綿さん夫妻は「今度、オンゾハンの袈裟にそれぞれの元のお堂の名前を書いておこう」と話していた。

さらに別の「オンゾハン」で、何十年も前に災害を期に合併したところでも、「このオンゾハンは、元々私たちがお世話していたもので、こっちは別のところから来たもの」と話しているのを聞いた。世話方は、合併後の全ての「オンゾハン」を平等に扱うが、昔から世話している「オンゾハン」に愛着を持ったり、自然と区別をしたりするようである。

「奈呉町」のように、「地藏堂」を一か所にまとめたい地区は、他にもあるという。

しかし、「奈呉町」は区画整理に伴って補助金が下りたことと、地域住民の意見をまとめることができたという2つの要因があったからこそ実現したのだと、自治会長の綿さんはおっしゃっていた

4-2. 「今井」さんの世話するオンゾハン

「奈呉町」では、住民の意見をひとつにまとめ、現在のような世話の形態にすることが出来たが、世話を1世帯のみですることを決めた世話方もある。

「今井さん」は、「法土寺町」の放生津橋橋詰にあるお堂の「オンゾハン」を一軒だけで世話している。少なくとも、「今井さん」のおばあさんが世話をしていた時代から「オンゾハン」の金銭の管理は「今井家」が担当していたと言うから、昔から「オンゾハン」の世話に熱心だったようである。



写真5-8 北日本新聞に掲載された記事



写真5-9 奈呉町地藏堂

「オンゾハン」は、昭和36(1961)年の道路改良時に現在の場所に移った。今井さんの世話するお堂では、平成21(2009)年に、「お堂の再築」の話が持ち上がったが、それに反対するほかの世話方と今井さんとの間で意見が対立し、最後までまとまる事はなかったという。

それまでは、15世帯ほどで世話をしていたが、「今井さん」を除く全ての世話方が世話をやめ、その人たちの大半は隣のオンゾハンを世話するようになった。それ以来、「今井家」のみで世話をするようになった。

「お堂」の再築は、はじめ建築会社に依頼したが、見積もりを出してもらった時点で予算をはるかに上回っていたため諦めたという。その後のある日新聞を読んでいたら、富山職芸学院が、歴史的な建物の改築を行っているという記事を読んで電話をし、富山職芸学院の学生に「お堂」をつくってもらった。

「地蔵祭」は、近所の東橋近くにある2つのお堂と合同で行っている。毎年、他のお堂を世話をする人とともに、「オンゾハン」を洗ったり、お経をあげてもらっている。

「今井恵子」さんは、調査で私が知り合った方々のなかでも、特に世話に熱心な方である。法土寺に嫁いで来て間もない頃と、ひどい吹雪の日の2回オンゾハンが夢に出てきてからというもの、信仰心をさらに強くし、それ以来世話を大変だと思った事はないという。

合同で「地蔵祭」を行っている人々と話しているときに、高齢化に伴うお堂の合併の話が出たことがあったが、自分たちが元気なうちは1軒だけで世話をしたいと言っていた。

さらに、合併する事になるとお堂を移転する必要があるが、本来オンゾハンは事故の起こりやすい場所で安置され、人々のことを見守っているのであり、お堂の場所を世話方の理由で簡単に変えてしまうのはよくないと、「今井さん」は語った。その一方で、自分たちが世話ができなくなったときに合併する際の費用を積み立てしているという。

5. まとめと考察

新湊には、「地蔵祭」以外にも、曳山祭や獅子舞などの派手な祭から、気比住吉神社の「清祓10(きよはらい)」などのささやかな行事まで数多くの祭がある。

昔の人が事故に遭った場所や、町の中の危険な場所にお堂がつくられるため、「オンゾハン」は身近で人々を守ってくれる存在として、心の拠りどころになりやすかったのではないかと。新湊は内川や海が近く水害の絶えない地域だったため、「オンゾハン」も水害に由来するものが特に多かった。水害以外にも火災や動物(キツネ、タヌキ、イタチなど)に、化かされるのを畏れた住民が「オンゾハン」を作ることもあり、「オンゾハン」は過去の災害の供養だけではなく、未来に起こる可能性のある災害を封じるためにつくられることも多かった。

また、「オンゾハン」以外にも、疫病を防ぐために良いとされる場所に来名戸社(くなしや)をつくるなど、当時の事情に合わせて石仏や戦争の供養塔が多く作られた。

調査をしてみると、「新湊」では高齢化と人口減少が地蔵信仰に大きな影響を与えていることが分かった。先にも述べたように、現在の70歳代以上の高齢者は子どもの頃から自然と「オンゾハンや仏教」に関わる人が多かった。

しかし現在ではそのような習慣もほとんどなくなって高齢者にも関心の薄い人が増え、60歳代以下の人々や若者ともなると、さらにそのような人が多いのが現状である。実際に、地蔵祭を見学した際にも60歳代以下の人は数人であり、大学生である私が「オンゾハン」に関心があることに喜んでくださる方もしばしばいた。

高齢化と人口減少が進み、世話を諦めてしまった町もある。例えば、「山王町」のある「オンゾハン」では世話をすることが、できなくなったため「オンゾハン」の魂を抜き、お堂を取り壊したという。

さらに他の町でも世話をしきれなくなり、斎場にオンゾハンを持って行くことがあったそうだ。筆者は複数の方からこの話を聞いたが、どの方も悲しそうであり、どこか悔しそうに語る人もいた。

このように、住民の意志とは反対に、やむを得ず衰退してゆく「オンゾハン」が増えている。

以上のような背景があり、やがて「地蔵祭」の担い手も子供から高齢者へと移り変わった。現在70歳以上の高齢者が子供の時は、奉加集めやお供え物の分配、恒例イベントなど子供たちが自ら楽しんだり、子供たちを楽しませるための催しをしており、子供が主役の祭だった。

しかし、現在では若者や子供が関わるということがほとんどないため、子供のころに「地蔵祭」を楽しみにしていた人々が、自分たちの孫世代の健やかな成長を願って「地蔵祭」を続けている。現在でも世話や地蔵祭を継続しているところは、少人数で何とか維持しているところが多い。

しかし、将来的にさらに世話が難しくなったときには合併することになる。合併には、新しいお堂の建設費用など高額の出費を要するので、事前に積み立てておくことが必要になる。

「世話方がいなくなったとしても、お金を積み立てておけば余裕のある所に託すことができるので安心だ」と話している人がいたが、オンゾハンに関して「お金があれば、心に余裕が生まれる」ようである。

「オンゾハン」を守り続けている人々は、「オンゾハン」に対する関心が高く、熱心な人が多い。私が聞き取り調査をした、昔から「オンゾハン」に関わっている人や各町の自治会長のなかには自分の町以外のオンゾハンの情報を知っている人も多い。

「〇〇町のオンゾハンは最近合併した」「うちの町では地蔵祭のときに△△を使うけど、どうやらこれは珍しいらしい」などという話を色々な方から聞いた。これは、ただ黙々と自分の町の「オンゾハン」を世話するのではなく、他の「オンゾハン」にも関心を持っているということだ。このような人達が互いに情報を交換し合いながら「オンゾハン」を守っているのである。

以上のように、現在は人口に対してオンゾハンに関心ある人は減ったが、世話を熱心な人や地域に関心のある人によって保っている。これからは今までよりもさらに高齢化が進み、世話方が少なくなるだろう。そうなった時にいかに地域住民の意見をまとめ、その町にとって最善の方法をとることが鍵になるだろうと考える。

「用語説明」

1) 「つくりもんまつり1)」とは、9月24日前後に行われる祭。本来は地蔵に供える野菜や果物で大小様々な動物や人物、建物、乗り物などを造るユニークな祭。

2、岐(クナト2)とは、「クナト」の書き方は様々であるが本来は「岐」と書く。「クナト」とはY字路の分岐点の部分のことを言い、昔は岐から先に疫病が入らないように、魔除けとして来名戸社をつくった。

射水市内の4か所に来名戸社があるという。「道祖神の原型」ともいわれる。

3) 白拍子3)とは、平安時代から鎌倉時代に流行した歌舞を演じる遊女のこと。

- 4) 高貴な方の落胤4)とは、身分の高い男が、正妻以外の身分の低い女性に産ませた子。
- 5) 木鼻5)とは、「キバナ」と読む。建築用語で、貫や大輪などが柱から突き出している部分をいう。初めは簡素な形のものが多かったが、近世になって象の鼻、竜頭、獅子、草花などの立体的彫刻になった。
- 6) 地蔵菩薩の縁日6)とは、仏、菩薩などの降誕(誕生)、示現(この世に現れる)など神仏に縁のある日で、この日を選んで参詣すると普通に勝る御利益があるとされる。代表的なものには毎月8日の薬師如来の縁日、1月10日の「開門神事福男選び」で有名な兵庫県西宮神社の「十日えびす」などがある。縁日の起源は平安時代であり、一般的に庶民に広がったのは江戸時代のこと。
- 7) 御詠歌7)とは、詠歌、巡礼歌ともいう。仏教音楽の一つであり、一般教徒が寺院、霊場巡礼の際に唱える歌。「短歌や和讃」に節をつけたもので、鈴(れい)に合わせて歌うことが多い。
- 8) 地蔵堂の起工式8)とは、「高野山真言宗」では土公供(どこうく)という。たくさんの人のおかげでようやく建築の運びとなったご縁に感謝し、土地の神様を鎮め、工事が安全に行われ良い建築を完成させることを誓う意味もある儀式。また、従前よりその土地に住む生き物の大切な命を奪ってしまうかもしれないため、その供養も兼ねて儀式が行われる。
- 9) あんじさん9)とは、新湊では尼さんのことを「あんじさん」という。
- 10) 清祓10)とは、気比住吉神社にある御神木の杉の木に宿る「高神様」(たかがみさま)という「天狗の神様の祭」のこと。清祓いは、春と秋の年二回行われ、祭のときはお供え物をして、お経をあげてもらう。

「謝辞」

調査を行うにあたりお世話になった「水辺のまち新湊」の「二〇紀代人」さんはじめ、聞き取りにご参加いただいた、奈呉町自治会長の「綿正樹」さん、法土寺自治会長の「桧物和広」さん、光明寺の「肥田啓章」住職、射水市新湊博物館の「松山充宏」さん、「地蔵祭」に参加させていただいた東町、山王町の方々など沢山の方に感謝申し上げます。ご多忙にも関わらず、親切に受け答えをしてくださったことは励みとなりました。

この場を借りて謝意を述べたいと思います。ありがとうございました。

「参考文献」

大田栄太郎『日本の民俗 富山』第一法規株式会社、1974年。

尾田武雄『とやまの石仏たち』桂書房、2008年。

新湊の歴史編さん委員会『しんみなとの歴史』新湊市、1997年。

保坂俊司『図解 仏教入門』ナツメ社、2010年。

II. 法土寺町4地蔵・その1「まつり写真記録」

「しんみなとの石仏」第3集より抜粋／放生津文化振興会

2003年(平成15年)2月23日

地蔵調査番号 40

名称 地蔵菩薩

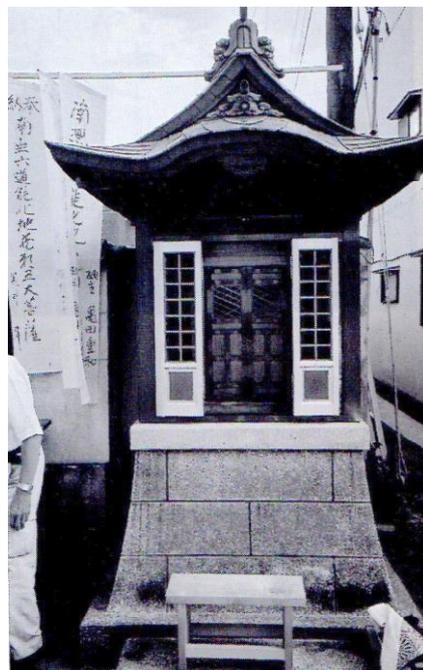
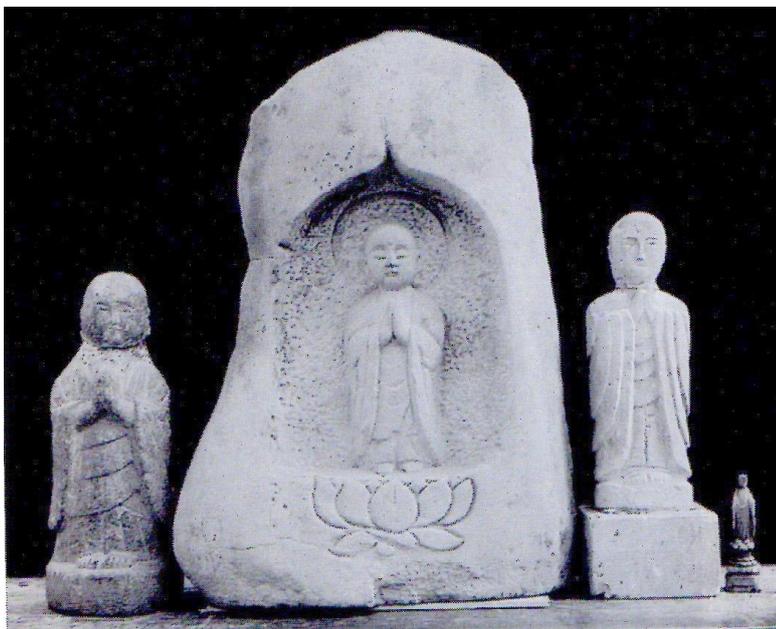
所在地 立町14-31(法土寺町) 姫野 稔 宅横

大きさ ① 高さ 12cm 幅 8cm 形式 ① 立像 丸彫
② 高さ 30cm 幅 16cm ② 立像 浮彫
③ 高さ 9cm 幅 6cm ③ 立像 丸彫

地蔵祭 8月25日ごろ

世話方 亀田 多美子 (3班(20世帯)で持ち回り)

法土寺町にある3箇所のお地蔵さんを1箇所まとめる案がでたとき、当地蔵さんは、この場所においてほしいと、近くの婦人の夢枕に立たれたので移動しないことになった。そして、昭和58年8月、有志より寄付を集め土合氏・大工 加治甚一作の小堂を新設したいきさつがある。浮彫の地蔵さんは自慢の美顔である。



「地蔵まつり」
2014年(平成26年)8月



法土寺町「姫野宅横地蔵菩薩像」世話人会

「姫野美和子」さんが中心となり、精力的にお世話をしている。

実施事業

- ①地蔵まつり
- ②打ち合わせ会
- ③収支報告
- ④月別世話人
- ⑤案内状の作成



その2

地蔵調査番号 42

名称 地蔵菩薩

所在地 立町14-17 (法土寺町) 法土寺町公民館 横

大きさ 高さ 28cm 幅 12cm 形式 立像 丸彫

地蔵祭 8月24日 世話方 加治 美津好、上田 静江

宝暦10年法土寺町庚辰2月吉日

従来公民館横(道路側)にあったが、平成6年11月公民館改築に伴い現在地に移転する。

祭りは三地蔵(41・42・43)合同で行う。



その3

地蔵調査番号 41

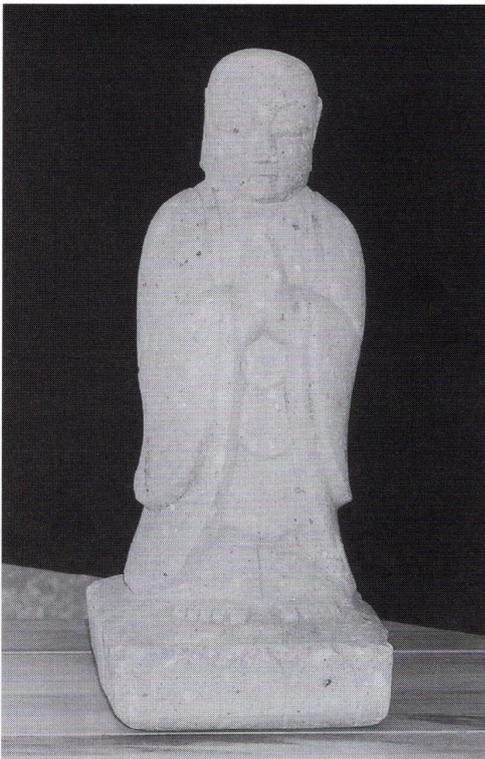
名 称 地蔵菩薩

所在地 立町15-12 (法土寺町) 金谷 荘三 宅横

大きさ 高さ 28cm 幅 12cm 形 式 立像 丸彫

地蔵祭 8月24日 世話方 金谷 郁代、塩谷 久子

小堂はセメント造りで、先年まで曼陀羅寺のお参りであったが、近年より合同で公民館にて祭りを行う。



その4

地蔵調査番号 43

名称 **地蔵菩薩**

所在地 立町16-7 (法土寺町)

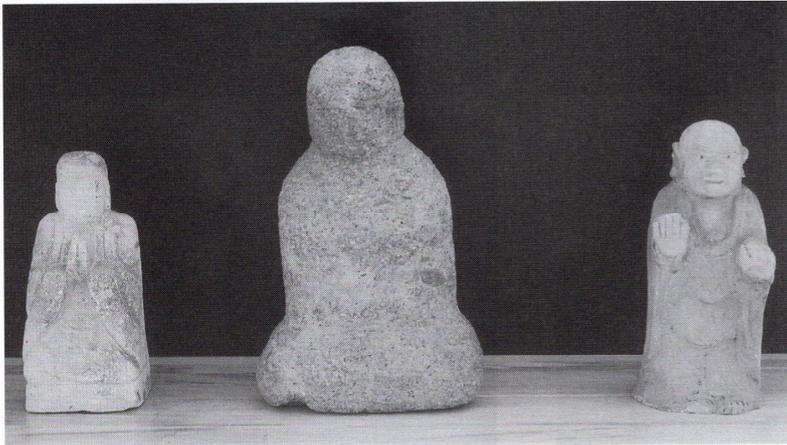
放生津橋 南橋詰

大きさ	① 高さ 30cm	幅 18cm	形式	① 坐像	丸彫
	② 高さ 18cm	幅 10cm		② 坐像	丸彫
	③ 高さ 20cm	幅 10cm		③ 立像	丸彫

地蔵祭 8月24日

世話方 今井 通・恵子

昭和36年道路改良時に現在地に移設する。
祭りは41、42番合同で公民館にて行なわれる。



新湊のオンゾハン

新湊市文化財審議委員会

荒木菊男

石仏の代名詞のように使われ、庶民にもっとも親しまれている数多い新湊のオンゾハン（地藏尊）について、その普及の背景を中心に信仰のおこり等検討したい。

一、地藏信仰普及の背景

地藏信仰普及の大きな要因となったと考えられる四つの項目について検討したい。

(一) 自然に対する恐れ

自然に対する恐れとして特に原因となったものに、水難、火災、疫病の三つがあげられる。

(1) 水難 水難は大別して二つある。一つは子供の溺死である。

富山湾に面する奈呉の浦は、白砂の海辺で（太平洋戦争後テトラポットで埋まる。）ここは子供達には最良の遊び場であった。また、放生津潟につらなる村々を流れる川や内川は、物資の輸送と射水平野の農業水利にあてられていた。ここは水ぬるむ頃からスズメ貝（シジミ貝）をとったり、鮒を釣り、夏は水に飛び込んだ遊びの広場であった。この裏に、溺死水難の惨事があり親たちは子供の供養に、もの悲しい賽の河原の和讃に登場する地藏尊をまつり救いを求めた。いま一つは、漁業と海運の町として栄えた中に、海難のケースが多く、そのことが地藏信仰や観音信仰に結びつく要因となったと考えられる。「板子一枚

下地獄」といった命がけの無謀に近い操業もあり海難の記録は各寺院の過去帳に多々見ることが出来る。八幡町の光山寺前にある二十一人墓と刻む大きな地藏尊、三日曾根出町の大きな延命地藏や浜町の地藏、川端近くの地藏はこれにかかわるものがある。

(2) 火災 新湊では、元禄九年（一六九六）三月放生津の大火

より、昭和十六年（一九四一）四月古新町・長徳寺の大火まで二四五年間に五十戸以上の火災が実に四十四回もあり約六年に一度はこの火災に遭ったことになる。屋根板葺、木造家屋で経験した悲惨な火災から地藏信仰への背景が考えられる。東町六角堂地藏、水難であげた三日曾根出町の延命地藏などには大火延焼防止に地藏の活躍が伝えられる。

(3) 疫病 明治十九年、北陸を襲ったコレラは、堀岡でも猛威

をふるい、死者続出し火葬場その用に堪えず放生津松原の広場をこれに充てたという。（堀岡村史）、また、作道を中心とするワイル氏病の流行は、大正四年から七年にかけ、作道だけでも五三五名の患者が発生し、うち、一六五名が死亡する大惨事となった。このため作道・海老江・放生津に地藏菩薩を本地仏とするオコリ（コレラ）の宮という小祠を建てた。また、堀岡東町では疫病塞への菩薩として地藏尊を祀った。

(二) 宗教的土壌

新湊には、およそ全国平均の三倍に近い神社(約一二〇)寺院(約七〇)があり、真宗王国富山の名は、新湊においても例外ではない。安全祈願は神社で、法要葬儀は寺院と割り切った使い分けがあり、家々には立派な仏壇と神棚が設けられていることが通例のようになっていいる。これは永い歴史の積み重ねによって培かれたものであり、地藏信仰が伝統であり、数多い新湊の地藏は、この宗教的土壌がなくてはこのように広まり得なかったのではないか。

(三) 海運の発達

新湊には石仏の素材となる石が採れない事実があり、海運の発達なしには殆ど石仏を入手することができなかった。江戸中期に入ると造船技術が発達し、航海術も石黒信由の『算法渡海標的』などの優れた著書も出て急速な発達をした。出津米をてこにして廻船業が栄え、これに付随して行く先々で地藏を手に入れることが出来るようになった。新湊の石仏に使われている石は、佐渡、能登、越前、瀬戸内から買求められたものが多い。新湊にも石屋とばれる石材商が後にできているので、石工刻名のない地藏尊のうちには新湊で造られたものもあろう。とにかくも海運の発達は地藏信仰普及の重要な背景となった。

(四) 経済の発達

海運の発達と漁業の大漁に恵まれ新湊は経済的に潤うようになる。名物放生津の曳山の再建、改造は、おおむね十七世紀から十八世紀の豊かな海運と漁業の幸に支えられた。この時代こそ、地藏尊を気軽に求められる財力が備わったと考えたい。

二、地藏信仰のおこり

江戸の中期、全国的な地藏信仰ブームの時期に新湊にも地藏信仰がおきたとされる。江戸期における特徴として極めて民間宗教色の強いことがあげられる。一般に地藏尊は真言宗や禅宗と縁が深く、それらの寺院に多くまつられている事実をあげている。しかし新湊は、浄土真宗、浄土宗の寺院が約七五%を占めており、寺院と地藏尊の結びつきは、地藏まつりに読経をお願いするだけで普段はあまりご縁をもっていない。つまり、地藏信仰は宗教とは関係なく、極めて民間宗教色が強く、庶民の素朴な心情から地藏尊がまつられていると考えられる。

結 び

以上新湊の地藏信仰を観てきた。そして普及要因の多くが人の不幸によるとしたが、今日は、火災件数、疫病件数、水難件数等どれをみても激減している。したがって地藏信仰の要因は、その意味を失い衰退の大きな原因となっていることは否定できない。しかし子供の交通事故や産児制限といった新しい要因もあり、地藏尊の役割は終わりを過ぎず、人々の不幸があるかぎり絶えないのでなからうか。

オンゾハン 「地蔵菩薩」史料

作成／2023年/06月/27日

放生津校下「ふり返る未来研究会」

協力／法土寺町「姫野宅横地蔵菩薩像」世話人会

編集／桧物和広 Kazuhiro Himono

富山県射水市立町12-5 TEL0766-84-8150

<https://www.houdoujimachi-imizu.jp/>

e-mail himokazu@nifty.com

※地域の歴史を学ぶための資料です。